虫ぼし抄

『日本近代美術関係マイクロ資料コレクション』の紹介

長　谷　洋　一

はじめに

意外に思うかもしれないが、「美術」という言葉は、明治6年（1873）に日本政府がウィーン万国博覧会へ出品した折の規約に初めて登場する造語である。それまでは日本絵画や仏像などは、考古遺物などとともに「書画骨董」「古器旧物」と称され、混沌とした「古いモノ」の世界に含まれていた。出品規約には「美術（西洋ニテ音楽、画学、像ヲ作ル術、詩学等ヲ美術ト云フ）ノ博覧場ヲ工作ノ為ニ用フル事。」と記されている。これ以降、「古いモノ」の世界はそれぞれの学問領域によって峻別され秩序だてられて現在の日本美術史もここから誕生する。と同時に、明治初期には西欧から様々な思想や価値体系がもたらされ、誕生したばかりの「日本美術」においても伝統の維持と近代化が図られた時代でもある。

こうした近代日本美術の誕生・展開のプロセスを知る上で不可欠なのは、明治期以降に刊行された美術雑誌である。今では雑誌原本は散逸し、架蔵している図書館でも貴重書となって容易に利用することが困難であった。このたびマイクロ化された近代日本美術に関連する美術雑誌が本学図書館に所蔵され、広く研究に資することが出来るようになった。そこで、マイクロ化された美術雑誌の紹介を行いながら「近代日本美術」誕生から大正期に至る流れをみていきたい。

1. 殖産興業と美術

明治を迎えて日本が早くに近代化を進めることが出来たのは、誕生してまもない「美術」のおかげであるといってよい。折しも19世紀後半、西欧ではジャポニスムが沸き起こり、日本の美術工芸品を輸出し外貨を獲得して社会的インフラを整備していった。ウィーン万国博覧会への出品もその一環である。

ウィーン万国博覧会や明治11年（1878）のパリ万国博覧会に関与した佐野常民や九鬼隆一らによって明治12年（1879）に龍池会が設立された。龍池会は殖産興業の一環としての伝統美術、特に日本画の振興と古美術保護が目指された。龍池会は明治20年（1887）に日本美術協会と改められ、会報の『日本美術協会報告』が刊行された。明治33年（1900）のパリ万国博覧会への出品選定には日本美術協会が担当しており、『日本美術協会報告』の記事からはジャポニスムを背景にした殖産興業と日本の伝統的美術工芸が結びついた点を明らかにすることができるとともに、明治政府の美術行政に対する公式見解として価値の高い内容を含んでいる。

『絵画叢誌』は、明治17年（1884）に設立された東洋絵画会の機関誌『東洋絵画叢誌』の改訂新版である。「国益」としての日本美術の伝統復興、近代化を掲げた点は『日本美術協会報告』と同様であるが、展覧会記事や西洋画に関する記事など時事的話題も多数掲載された点が異なる。『日本美術協会報告』が公的記録であるのに対して『絵画叢誌』は民間からの視点で記されており、日本美術誕生の実態をより詳しく把握することが可能である。

当時の美術界は、明治20年（1887）に東京美術学校が設立され、また同22年（1889）には黒田清輝を中心とした洋画の白馬会が設立している。両者を読みくらべることで、近代国家にふさわしい美術誕生の様相を具体的にみることができる。

2. 近代日本美術における京都と東京

実は、ジャポニスムを背景にした殖産興業を支えたのは、東京よりも京都の近代美術である。京都は「美術」の長い伝統や自主性を保守しようとし、京都美術の振興が日本美術全体の振興につながるとの自負もあった。西欧に対しても竹内栖鳳の渡欧にみるように、東京経由ではなく直接、西欧に目を向けていた点が注目される。

明治23年（1890）に画家の久保田米僊、幸野楳嶺らによって京都美術協会が設立され『京都美術雑

誌』が創刊された。

『京都美術協会雑誌』はこれを継承したもので（後に『京都美術』と改題)、『日本美術協会報告』『絵画叢誌』など東京系の美術雑誌に対抗したものであった。記事からは東京の近代美術とは違った京都近代美術の独自性をうかがうことが出来る資料である。

この3つの美術雑誌に掲載された記事、論説、報告などからは、近代日本美術の誕生を生々しく伝える資料として貴重である。

いっぽう東京での近代日本画は、日本美術協会系の「旧派」と岡倉天心（東京美術学校）率いる「新派」に分かれていたが、明治40年（1907）の文部省美術展覧会（文展）の開設によって新旧両派の対立は決定的となった。明治31年（1898)、日本近代美術を牽引してきた岡倉天心はスキャンダルによって東京美術学校校長を追われて下野し、日本美術院を設立、機関誌として『日本美術』が創刊された。『日本美術』からは、天心が率いた日本美術院や日本絵画協会の活動の動静はもとより、「新派」の活動を生々しく伝えている。

3. 美術総合雑誌

東洋美術史家である大村西崖が設立に関与し『真美大観』『東洋美術大観』など大型美術全集を刊行してきた審美書院が、明治42年（1909）に『美術之日本』を創刊する。

執筆陣は旧派団体である日本美術協会の関係者が多く、創刊の翌年からは日本美術協会「報告」を掲載し、旧派の機関誌的な一面を帯びている。天心主宰の『日本美術』と比較すると、この時期の日本画の動向が把握できよう。

『美術之日本』の大きな特徴としては、日本画だけでなく西洋美術、特に後期印象派、未来派の作品など同時期の西洋美術思潮を日本に紹介したことが掲げられる。このことが大正期から昭和初期にかけての日本画における新興絵画運動に結びついていくが、その展開を見るうえで重要な資料でもある。

またこれまでの美術雑誌が、西洋や日本あるいは日本画、洋画、彫刻といった各分野での縦割りで編集されたのに対して、『美術之日本』は美術を中心としつつ音楽、文学、演劇、書道などにも触れて「総合美術雑誌」を目指されたことも注目される。大正期、新たに登場した中産階級が都市を背景にしたモダンな芸術・文化・生活様式を生み出していったが、『美術之日本』の「美術・芸術」「文芸」の記事はモダンな生活文化を支える大きな要素となったことをうかがわせる。

水彩画家の大下藤次郎は、春鳥会（現美術出版社）を設立し、明治38年（1905）には、雑誌『みづゑ』を創刊する。平成4年（1992）まで刊行された老舗の月刊美術専門誌であるが、マイクロ資料には戦時中に改題された『新美術』『美術』までを収めている。

『みづゑ』は当初、水絵＝水彩画の普及のために刊行されたが、大正6年（1917）以降は、水彩画に限らず洋画と西洋絵画一般を中心とした美術雑誌となり、1920年代になると日本・東洋美術までも扱う総合美術誌へと変わり、各分野での活発な批評、紹介を掲載していった。『みづゑ』の水彩画から油絵、西洋絵画への編集方針変更は、日本でもようやく油彩画のもつより強い表現手段が求められた証しでもある。

『書画骨董雑誌』は明治39年（1906)、樋口傳を編集発行人として書画骨董雑誌社から刊行された。主だった内容は日本画や南画に関するものであるが、洋画・彫刻・工芸の分野にも及んでいる。日本の美術をとりまく政治情勢や美術行政についての情報、画家や収集家の動静、各種のゴシップまでを細かく伝えている。寄稿者は美術家だけでなく大隈重信など多彩な執筆陣を迎え、日本だけでなく東洋全体の美術史・評論史の貴重な資料となっているほか、美術をめぐる新たな受容環境に触れられている点が注目される。

4. 大正期の美術評論

『萬朝報』連載の家庭小説で人気作家となった田口掬汀は、大正初年頃に美術批評に転じ、大正4年（1915）に日本美術学院と中央美術社を創設する。中央美術社から刊行された『中央美術』は、この期の洋画壇、新興美術の動向を最もよくとらえている雑誌である。

折しも大正10年（1921）春に大原孫三郎が児島虎次郎に購入を委ねた名画による「大原家蒐集作品展覧会」が開かれ、翌年5月には東京でフランス人美術批評家のエルマン・デルスニス氏による「佛蘭西現代美術展覧会」が開かれた。同展覧会は、多数の西洋美術作品のオリジナルが国内で展示された画期的なもので、それまで図版などでしか触れること

が出来なかったアングルやクールベ、セザンヌ、ゴッホ、ルノワール、マチスなど19世紀末から20世紀初頭のフランス美術作品が日本にもたらされた。『中央美術』はオリジナルに触れた安井曽太郎、梅原龍三郎、岸田劉生、志賀直哉などの批評が寄せられ、当時の美術論の中核をなしている。田口は、『中央美術』を創刊した年に結城素明、鏑木清方、吉川霊華、平福百穂などに呼びかけて美術団体「金鈴社」を結成、中央美術展覧会を開設している。

展覧会を主宰したデルスニスと三越の社員であった黒田鵬心が、大正14年（1925）に共同で日仏芸術社を設立し、昭和6年（1931）まで、9回にわたりフランス美術展を開催、フランス美術をもとにした美術趣味の普及向上と美術教育への寄与を目的に美術雑誌『日仏芸術』を刊行する。挿絵も豊富で、時にはフランス美術雑誌の翻訳記事、現地からの寄稿記事を掲載し、同時期のヨーロッパ美術界の動向をいちはやく日本に紹介した。こうした日仏芸術社の活動は、今日に至るまで日本人の「印象派好き」の源泉とみることができよう。

日仏芸術社は展覧会を通じてフランス美術の紹介に努め作品の販売も行い、西洋美術の受容層の拡大をはかった。しかし、採算を度外視してロダンの大作を搬入したことや、パリでの日本美術展開催が失敗に終わったことから経済的苦境に陥り昭和6年（1931）に日仏芸術社は解散、『日仏芸術』も終刊となった。

大正13年（1924）、洋画家山本鼎、北原白秋の実弟である北原義雄によって雑誌『アトリエ』が、創刊された。

シュルレアリスムやゴッホ、マチス、ピカソなど斬新な評論、展覧会特集などで多くの読者を獲得していった。戦時中は統制のため『生活美術』と改題を余儀なくされて、その後休刊となるが、戦前の美術ジャーナリズムの中核をなす美術雑誌である。

明治に誕生した「美術」は、大正期には文学や映画などと結びついていく。マイクロ資料コレクションには、美術をめぐるこうした当時の文芸資料も広く収められている。

カメラの発達などにより写真や映画もまた芸術の一領域を占めるに至った。映画では、大正8年（1919）に外国映画専門誌『キネマ旬報』が刊行されたが、大正14年（1925）には日本映画の批評雑誌『映画往来』、翌年には文芸春秋社から『映画時代』が刊行される。映画に関する評論、エッセイ、情報から当時の文芸と映画との密接な関係がみてとれる。

また写真の分野でも欧米でのグラフ誌の流行を受けて、明治36年（1903）国木田独歩が編集長として月刊グラフ雑誌『東洋画報』が刊行された。同年秋には矢野龍溪が社長として近事画報社を設立、雑誌名も『近事画報』と改められた。『近事画報』は日露戦争開始から戦争後の日比谷焼き討ち事件までを多くの写真と絵画と文章で報道したもので、近代の錦絵にも多くえがかれ、絵画とメディアとの接近をうかがわせる。大正6年（1917）のロシア十月革命や大正11年（1922）のソビエト社会主義共和国連邦の成立は、日本の文芸界も無関心ではありえなかった。大隈重信は世界を大観することを必要として大正7年（1918）文芸雑誌『大観』を刊行し、評論と創作に力を入れ、また大正10年（1921）には『露西亜芸術』が刊行され、ロシアの文学、美術、演劇などが紹介されている。

おわりに

以上、雑駁ながら日本近代美術関係マイクロ資料コレクションの概要を紹介しながら、美術の誕生と戦前に至るまでの美術の展開をみてきた。

マイクロ資料コレクションに収められた美術雑誌、文芸雑誌を通観すれば、美術というものが、決して単なる道楽の一道具ではなく、折々の時代と社会世相を映し出す鏡であることが明らかであろう。つまり同コレクションは、日本の近代美術の誕生と戦前に至るまでの歩みを証言するものとしてきわめて高い価値をもつばかりではなく、西洋絵画の受容史、日本近代史、国文学、演劇、映画など、さまざまな分野にわたって利用できる価値をみいだすことが可能である。

本学の多くの研究者や学生がマイクロ資料コレクションを縦横無尽に活用して、より大きな成果を得ることを願ってやまない。

（はせ　よういち　文学部教授）